

もくじ

▽和文誌 20 周年記念号のお知らせ（九州大・綿貫茂喜）	1
▽国際シンポジウム第一報（神戸芸工大・古賀俊策）	1-2
▽韓国生理人類学会創立総会報告（千葉大・岩永光一）	2-3
▽2013 年度奨励賞受賞（常磐会短期大・土田幸恵）	3-4
▽研究室紹介（首都大東京・樋口貴広）	4-5
▽第 19 回欧州人類学会参加報告（千葉大大学院・吉田尚央）	5-6
▽交流から研究の発展を（九州大大学院・江頭優佳）	7
▽会議録	7-8
▽from Editors	8

【和文誌 20 周年記念号のお知らせ】

綿貫茂喜（九州大学・和文誌編集委員長）

日本生理人類学会誌（和文誌）は 1996 年 2 月に創刊号が発行されてから、巻号を重ね、来年の 2 月頃に第 20 巻 1 号をお届けする予定です。この間、和文誌編集委員会は 216 回開催され、多数の原著論文等を掲載してまいりました。会員の皆様にはこの間多くのご助言やご協力を賜り、有難く厚く御礼申し上げます。

和文誌創刊 20 周年を記念して編集委員会では幾つかの企画が進行中です。主な企画を述べますと、巻頭言（勝浦会長）、元・前・現編集委員長の対談、科研費で基盤 S および A に採択された先生方からの研究内容の報告記事を予定しています。

ところで和文誌は若手研究者の育成を一つの大きな目的としています。最近では若手からの投稿が増え編集委員一同喜んでいきます。査読内容を見てみると査読者からの厳しいけれどもどうか採択までもっていかうという意気込みが感じられます。その結果、論文奨励賞が受賞されずと編集委員としてはまさしく幸甚です。若手研究者の皆様、論文の書き方を練習すると思っ

て奮ってご投稿ください。
2012 年 5 月に開催された第 66 回長崎大会（草野大会長）から、大会時に開催されたシンポジウムを演者の先生方に文章化していただいて特集

記事として掲載するように致しました。これは会員数約 800 名に対して大会参加者は 200 名ほどですので、折角のシンポジウム内容をできるだけ会員の皆様にお伝えするためです。第 70 回大会でのシンポジウム特集も準備中です。どうぞ御期待下さい。

【ヒトの環境適応と全身的協関に関する国際シンポジウムのご案内（第一報）】

代表世話人 古賀俊策（神戸芸術工科大学）

国際シンポジウムを下記の会期・会場で開催いたします。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。詳細につきましては、本学会ホームページ、および PA ニュースで随時お知らせする予定です。なお、ポスターセッションと懇親会が開催されますので、たくさんの会員の皆様にお目にかかれることを心より楽しみにしております。是非、奮ってご参加頂けますようお願い申し上げます。

会期; 2015 年 3 月 14 日（土）～3 月 16 日（月）

会場; 神戸大学 発達科学部キャンパス
〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲 3-11

プログラム (1) シンポジウム

セッションおよび講演者（予定）一覧

**Session 1. Adaptation to cold environment
(Chairperson: Takafumi Maeda)**

Wouter D. van Marken Lichtenbelt (Maastricht Univ, Netherlands)

Takeshi Yoneshiro (Hokkaido Univ)

Hitoshi Wakabayashi (Chiba Institute of Technology)

Takafumi Maeda (Hokkaido Univ)

Session 2. Genetic variation and human phenotype (Chairpersons: Takayuki Nishimura & Susumu Kudo)

Chew Fook Tim (National Univ of Singapore)

Yee-How Say (UTAR, Malaysia)

Choongwon Jeong (Chicago Univ, USA)

Kazuhiro Nakayama (Jichi Medical Univ)

Session 3. Human evolution of exercise tolerance and its mechanistic link (Chairpersons: Shunsaku Koga & David C. Poole)

David C. Poole (Kansas State Univ, USA)

Anni Vanhatalo (Univ of Exeter, UK)

Shunsaku Koga (Kobe Design Univ)

Session 4. Human adaptability to modern society in Asian countries (Chairperson: Tetsuo Katsuura)

Gwanseob Shin (Ulsan National Institute of Science and Technology, Korea)

Sungphil Kim (Ulsan National Institute of Science and Technology, Korea)

Wang-Chin Tsai (Fo-Guang Univ, Republic of China)

Kadek Heri Sanjaya (Chiba Univ)

Session 5. Integrative approach to blood pressure control (Chairpersons: Keita Ishibashi & Yoshiyuki Fukuba)

J. Andrew Taylor (Harvard Medical School, USA)

Masashi Ichinose (Meiji Univ)

Hidehiko Komine (National Institute of Advanced Industrial Science and Technology)

Keita Ishibashi (Chiba Univ)

Session 6. Adaptation to hot environment (Chairpersons: Yutaka Tochiwara, Narihiko Kondo, & Yoshimitsu Inoue)

Titis Wijayanto (Universitas Gadjah Mada, Indonesia)

Jason Kai Wei Lee (Defence Medical & Environmental Research Institute, Singapore)

Tatsuro Amano (Kobe Univ)

Session 7. Circadian rhythm and adaptation to light environment (Chairpersons: Shigekazu Higuchi & Takeshi Morita)

George Brainard (Thomas Jefferson Univ, USA) (tentative)

Véronique Daneault (Hôpital du Sacré-Coeur de Montréal, Canada)

Session 8. Height and skeletal morphology in relation to modern life style (Chairperson: Akira Yasukouchi)

Michael Hermanussen (Aschauhof, Germany)

参加申込方法・参加費・ポスターセッション申込・懇親会費について

※第2報以降で掲載する予定です。

大会事務局（問合せ先）

〒651-2196 神戸市西区学園西町 8-1-1

神戸芸術工科大学古賀研究室気付 国際シンポジウム事務局

E-mail: is@jspa.net

【韓国生理人類科学会(KSPA)創立総会報告】

岩永光一（千葉大学）

この度、韓国の生理人類学会といえる韓国生理人類科学会（Korea Society of PhysioAnthropological science, KSPA）が創立される運びとなりました。去る8月22日、韓国の大田（テジョン）にある Hotel Adria で創立総会が開催され、現地の研究者、学生など約40名が出席しました。勝浦哲夫会長と私は、日本生理人類学会（JSPA）を代表して、お祝いを述べるために出席させて頂きました。勝浦会長が「Physiological Anthropology – past, present and future –」と題する記念招待講演を行い、出席していた韓国の研究者、学生から大変好評を博していました。

韓国では、学術団体は法人として存在するのが通例ということで、これからその手続きが行われるようですが、実質的な創立記念日はこの日（2014年8月22日）だと言って良いのでしょうか。



写真 1: 李主席会長を囲んで. 左から Jin Kyu Kang 学部長 (Hanbat 大学校), 勝浦哲夫 JSPA 会長, 李英淑 KSPA 主席会長, 筆者.

KSPA の創立に当たっての主席会長は全南大学校の李英淑 (Lee Young Suk) 先生 (写真 1), 会長は Hanbat 大学校の閔丙贊 (Min Byung Chan) 先生 (写真 2) です. 両先生とも日本に留学して学位を取得され日本語もお上手で, 当時の日本生理人類学会や日本人類学会の主要な先生方のこともよくご存じです. 私個人的には, 1997 年に千葉大学で開催された第 2 回日韓合同シンポジウムで, 事務局として李先生をお迎えしたことを良く覚えています. また, 閔先生とは 1990 年代の JSPA の国内大会や 2000 年に韓国 (ソウル) の延世大学校で開催された第 5 回国際生理人類学会議でお会いしました. また, 最近では, 本年 5 月に韓国の済州島で開催された第 1 回アジア人間工学・デザイン会議 (ACED) で両先生とお会いしました. この時に, 勝浦先生も一緒に旧交を温めたのが, この度の KSPA の創立を加速させた要因の 1 つになったのかもしれない.

JSPA は, その母体となる国際組織として国際生理人類学連合 (IAPA) に積極的に関与し, JSPA 副会長の安河内朗先生は現在の IAPA の会長を務めておられることは, 会員の皆様はよくご存じのことと思います. また, 来年 (2015 年 10 月 27 ~ 30 日) には, 勝浦先生を会議長として第 12 回国際生理人類学会議 (ICPA2015) が千葉市の東京ベイ幕張ホールで開催されます. KSPA から多くの研究者, 学生の皆様が参加されることを期待しています. 現在の生理人類学は, 日本が世界をリードする学問領域として発展してきました. 今後は, さらに多くの国の研究者が参加し, よりグローバルに発展することを, 一人の学会

員として期待せずにはおられません.



写真 2: 閔丙贊 (Min Byung Chan) KSPA 会長と勝浦哲夫 JSPA 会長

【2013 年度奨励賞受賞】

奨励賞を受賞して

土田幸恵 (常磐会短期大学)

この度は, *Journal of Physiological Anthropology* Vol.32:9, 2013 に掲載された我々の論文, Effects of a late supper on digestion and the absorption of dietary carbohydrates in the following morning が, 平成 26 年度日本生理人類学会奨励賞の栄誉を賜り, 心から感謝いたします. 名誉ある賞をいただき, 大変恐縮しております.

今回の論文は, 12 名の女子学生を対象に夕食時刻が翌日の朝食後の糖質の消化吸収に及ぼす影響を検討した実験です. 夕食を平均的な 18 時に摂取した場合よりも, 深夜 23 時に摂取した場合の方が, 翌日の試験朝食に含まれる糖質の口から盲腸までの消化管通過時間を有意に延長させ, 糖質の消化吸収率が有意に高くなったこと, さらに朝食後の 30, 60, 120, 150, 180 分後の血糖値が有意に高くなったという結果が得られました. 夜間摂食は就寝中に高インシュリン状態になりやすいという先行研究などからも, 我々の実験でも高インシュリン状態が朝まで継続しており, 朝食の糖質の消化吸収率高値と食後高血糖を招いたのではないかと推察しております.

近年の肥満者増加とそれに伴う生活習慣病に罹患率の高さについて, 時間生物学的な観点から夕食時刻などに着目した論文はありますが, 今回のように実際に介入を行い生理学的に実証したものはほとんどありません. よってこの結果は, 食事時刻を含む適切な食習慣は, 肥満や生活習慣

病を予防する上で重要であること考える一助となればと思っております。

今回実験を行うにあたり、早朝から夕方まで計5日間の介入実験にご協力いただいた被験者の皆様には大変感謝しております。また、実験計画の段階から論文作成にいたるまで終始ご指導いただいた大阪市立大学生活科学研究科名誉教授の曾根良昭先生、長期間にわたって実験のサポートをしてくださった同大学院生の秦佐和さんには心から感謝いたします。

最後になりましたが、生理人類学会のますますの発展を祈念いたしまして、お礼の言葉とさせていただきます。

【研究室紹介】

樋口貴広（首都大学東京人間健康科学研究科）

昨年度の第69回学会大会において、シンポジウムでの話題提供を担当したことがご縁で、研究室紹介の機会を頂戴いたしました。謹んで感謝申し上げます。



写真1: 研究室のある建物（13号館）

私たちの研究室は、知覚運動制御研究室といます。研究室がある建物（13号館）は、八王子市の南大沢キャンパスの中でも、運動施設や豊かな緑に囲まれたロケーションにあります。研究室では、私の専門である実験心理学の手法を中心として、「知覚・認知から見た身体運動の理解とその支援」に関する研究を行っています。研究成果をリハビリテーションやスポーツに還元することを主眼としていることもあり、大学院生には、医療従事者（理学療法士、作業療法士、看護師）や運動指導士（高齢者、幼児対象）など、運動支援の現場で活躍する様々な社会人が所属してきました。こうした社会人と、現役で進学してくる

学生とが、ゼミを通して情報交換を行うことで、特定の専門領域に偏らない客観的な議論ができる環境づくりを目指しています。



写真2: 研究室の様子

主たる動作対象は、歩行や立位姿勢です。測定機材として、三次元動作解析装置（OQUS、カメラ16台）、視線行動を解析するアイマークレコーダ、可搬型フォースプレート、視覚情報を遮断するための液晶シャッターゴーグル、ヘッドマウントディスプレイなどがあります。このほか、本学荒川キャンパスにあるfMRIの施設を利用して、運動模倣の研究を行った実績もあります。なお研究テーマそのものは、必ずしも歩行や立位姿勢に限定されません。大学院生の自由な発想に基づき企画されたものも、数多くあります。



写真3: 隙間通過行動を測定するための可変式ドア

研究室の中で数多く取り組んでいる実験は、狭い隙間を通り抜ける行動を調べた実験です。実験室には、歩行中に隙間の大きさを変えられる、可変式ドアと呼ばれる装置があります。「隙間を通り抜ける動作を研究して、いったい何がわかるのだろうか？」と疑問に思われる方が多いかもしれません。

私たちは隙間通過の動作を通して、人間が歩行中に環境と身体の間隔関係を知覚するプロセスを明らかにしようと考えています。これまで得られた成果として、高齢者や脳卒中片麻痺患者の隙間通過行動を観察することで、一般的な転倒リスク評価では見えてこない、対象者の問題点が見えてきました。また、株式会社ホンダ技術研究所との共同研究により、自動車運転時の車両感覚の理解につながる基礎研究を行いました。さらに、いわゆる“歩きスマホ”がなぜ危険かを実験的にデモンストレーションする試みも、この可変式ドアを使って行ってきました。

知覚・認知に関する知識は、身体運動を理解する上で、生理学的・生体力学的・解剖学的な知識と等しく、欠くことのできない知識です。身体運動の新たな一面が明らかとなるよう、研究室一同で努力していく所存です。なお、研究室の最新の動向はホームページから閲覧可能です。何かの機会にご覧いただければ望外の喜びです。

(<http://www.comp.tmu.ac.jp/locomotion-lab/higuchi/higu-index.html>) .

【第 19 回ヨーロッパ人類学会大会参加報告】

吉田尚央（千葉大学大学院工学研究科）

2014 年 8 月 25 日から 29 日の日程で、ロシアのモスクワ市、ロモノーソフ・モスクワ国立総合大学（Lomonosov Moscow State University）において、ANTHROPOLOGY: UNITY IN DIVERSITY をテーマとして第 19 回ヨーロッパ人類学会大会が開催されました。日本生理人類学会からは、九州大学の安河内朗先生と樋口重和先生、北海道大学の前田享史先生、森林総合研究所の恒次祐子先生、千葉大学から石橋圭太先生と私の計 6 名が参加いたしました。

我々は前日の 8 月 24 日に現地入りしました。現地は快晴で少し日差しが強いものの、空気は乾いており過ごしやすい気候でした。空港に到着してさっそく、手配していたタクシーがないというトラブルに見舞われたものの、無事ホテルまで辿り着きました。その後ホテルの近くのレストランで食事をして、その日は解散となりました。

大会初日となる 25 日は登録、開会式およびビュッフェスタイルの食事会が開催されました。会場はモスクワ大学の the Anuchin Research Institute and Museum of Anthropology で、赤の広場やクレ

ムリンのすぐそばに位置しており、校舎は写真のように、神殿を思わせるような外観でした。



写真 1: 大会会場の外観

開会式では、Alexandra Buzhilova 大会長の挨拶から始まり、Pavao Rudan 先生による今日までの人類学の流れに関するお話などがありました。また、モスクワ大学の学生らによる弦楽四重奏が披露されました。その後のビュッフェスタイルの食事会では、Pavao Rudan 先生と Saša Missoni 先生、大会事務局長である Elena Godina 先生、講演者の Barry Bogin 先生に挨拶させて頂きました。気さくな先生方に暖かく迎えて頂いたおかげで、初めてのロシアに緊張していた私も少し肩の力を抜く事ができました。



写真 2: Museum Hall 内の展示品

大会 2 日目の 26 日から、講演や発表が始まりました。発表は二つの会場で行われ、Gorbachev Hall と Museum Hall で同時に進行されていました。Gorbachev Hall は通常の講堂といった形でしたが、Museum Hall はその名の通り、部屋の中に人類学に関する資料が並べられておりました。壁にそって様々な資料が並べられており、発掘した資料を

撮影するための古いカメラやマルチン式人体測定器といった研究用の器具の他、いくつかの民族の衣服や装飾品、人類学の基礎を築いた研究者の肖像など、興味深い資料ばかりでした。

この日の午前は **Human Diversity** と **Molecular Anthropology – new advances** の二つのセッションが行われました。昼食を挟んで、**Alexander Kozintsev** 先生と **Gregory Livshits** 先生による講演がありました。その後、**Human Diversity** のセッションの続きと並行して、**Physiological Anthropology** のセッションが行われました。日本生理人類学会からは、石橋先生、樋口先生、前田先生、恒次先生が口頭発表をされ、私はポスター発表を行いました。



写真 3: **Physiological Anthropology** セッションの様子

その夜はエクスカーションとして、モスクワ市内をバスで巡るナイトツアーが開催されました。会場から赤の広場のそばを通りながら観光ガイドの解説を受けつつ、バス停へ移動しました。バスツアーの道中では途中3回ほど停車し、ピョートル大帝記念碑、雀が丘からの市街の夜景、モスクワ大学のメインキャンパスなどを見る事ができました。

大会3日目となる27日は、午前中に **Applied Anthropology** と **Humans and Environment** の2セッションが行われました。昼食後に **Igor Mascie-Taylor** 先生の講演が行われた後、**Applied Anthropology** セッションの続きと並行して **Human Evolution** セッションが行われました。また、この日の晩には **Conference Dinner** が開催され、10名ほどでテーブルを囲んで歓談しました。



写真 4: **Conference Dinner** の様子

(写真は石橋先生より御提供頂きました)

大会4日目の28日には **Miscellaneous** と **Growth and Development, Aging and Senescence** の3セッションが行われました。昼食後には **Barry Bogin** 先生と **Michael Hermanussen** 先生の講演がありました。その後、ロシアの人類学研究者による映像資料が上映されました。最終日である29日には講演や発表はなく、閉会式をもって大会の全日程が終了となりました。

私にとって今回発表された研究の内容は、対象から手法まで実に多種多様であり、人類学という学問の幅広さを強く感じた大会となりました。また普段の学会とは違い、人類学という一段と大きな枠組みの中で様々な研究を一度に見ることができたことで、これまでイメージできていなかったそれぞれの人類学研究の間の繋がり方が少しだけ掴めたように思います。この経験を研究における新たな考え方や視点の置き方といった形にして、これからの自身の研究生活に活かしていきたいと考えております。



写真 5: 参加者集合写真(EAAのwebページより)

【交流から研究の発展を】

～2014 年度生理人類学会夏季セミナー報告～

江頭優佳（九州大学大学院統合新領域学府）

2014 年度日本生理人類学会夏期セミナーが平成 26 年 9 月 4, 5 日に関西セミナーハウスにて開催されました。今回で三度目を数える夏期セミナーは毎年合宿形式で行われており、学会とは異なるゆっくりとした雰囲気が特徴的です。一日目は特別講演、ポスター発表、若手の会企画、二日目には測定データの統計解析の講習会、二種類の研究部会という内容でした。

特別講演は勝浦哲夫先生（千葉大）、井上芳光先生（大阪国際大）より研究生活を振り返ってのお話でした。勝浦先生は佐藤方彦先生との出会いや九州芸術工科大学での学生生活、生理人類学会の歴史についてご講演下さいました。現在学会でお目にかかる先生方の学生時代のエピソードや研究風景の写真など、貴重な内容が満載でした。井上先生は研究が花開くまでの歩みをお聞かせ下さいました。最初は細部を見つめているが経験を重ねるうちに全体が見えるようになり、研究の着眼点も広がる。そこからは研究が楽しくて仕方がなくなる、という話が大変印象に残っています。

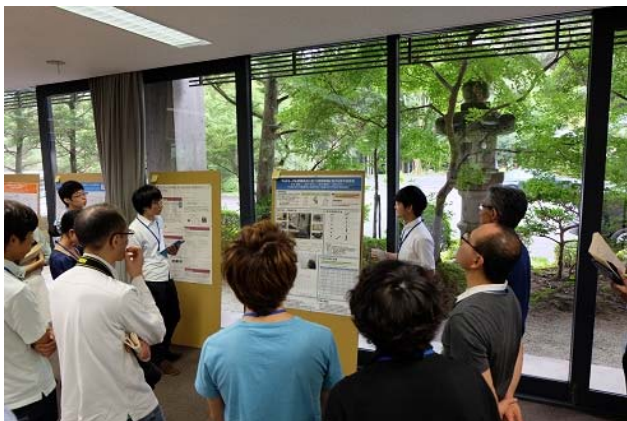


写真: ポスターセッションの様子

ポスター発表では各所で活発な意見交換がありました。私自身も、指標の取り扱い方に対し具体的な示唆を頂きました。学会発表にはない、聞きやすさは、夏期セミナーの最も有意義な点の一つではないでしょうか。

測定データの統計解析講習では北村真吾先生（国立精神・神経医療研究センター）、小林宏光先生（石川県立看護大学）が講演されました。北村先生からは統計をかける際に前提とすること、

検定の種類などをお話しいただき、実際の統計結果を見ながら伺いたいと感じました。小林先生からは統計の歴史を伺いました。t 検定で有名なスチューデントは実は偽名である、といった統計学の裏話のような内容でした。研究部会はシステムバイオエンジニアリング部会、オフィス研究部会の二種類が実施され、参加者はそれぞれ興味のある部会を選び参加する形式でした。夜も充実しています。今回の若手の会企画は参加者同士で質問し合う自己紹介でした。その後すぐに懇親会に移動したため、学校を超えた交流が盛り上がりました。生理人類学会は懇親会も充実していますが、夏期セミナーは時間を気にする必要がないため盛り上がりもひとしおです。

全体を通じ、夏期セミナーの魅力は多くの先生、先輩方、同級生と会え、話せることにあると思います。また来夏、セミナーに参加できることを楽しみにしております。

なお、写真は高橋良香先生（京都大学）よりご提供いただきました。有難うございます。

from Editors

次号 Vol.24 No.1 の原稿締切は、
2015 年 2 月 1 日です。

▽ 早くも今号が今年最後の PANews となりました。今号の「研究室紹介」では、関東地区の首都大学東京にスポットを当てました。また、「和文誌 20 周年記念号のお知らせ」では綿貫和文誌編集委員長より御寄稿を頂きました。次号は第 71 回大会（神戸大学六甲キャンパス）における研究発表奨励賞の授与に関連する記事を中心にお届けする予定です。

▽ 今号も企画記事「研究室紹介学」を首都大学東京の樋口先生にご寄稿いただきまして第五回目を掲載することができました。また、和文誌 20 周年記念号のお知らせをご寄稿いただきました九州大学の綿貫先生、2013 年度奨励賞を受賞された常磐会短期大学の土田先生を含め、ご寄稿いただきました先生方にはこの場を借りて感謝申

し上げます。早いもので今号が今年最後の PANews となりました。今年も多くの方の皆様よりご寄稿を頂き、会員の皆様へ PANews を発行することができました。重ねて感謝申し上げます。今後も学会員の先生方からのご寄稿をお願いいたします。

「むさしのの空真青なる落葉かな（水原秋桜子）」

▽ PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター

小崎 智照 九州大学 芸術工学研究院

メールアドレス panews@jspa.net

cc. abed@ip.kyusan-u.ac.jp

cc. kozaki@design.kyushu-u.ac.jp

※お問い合わせなどは、上記のメールアドレスに加え、編集委員のメールアドレスを cc.に付けてお送り願います